

2022 年度前期 START プログラム 事後レポート

所属学部・学科・学年	工学部第四類建築プログラム 2 年
------------	-------------------

(1) START プログラムに参加して何を学んだか、この経験を今後どのように活かしていきたいか

START プログラムに参加して物事を様々な視点から捉えようとするのが大切だと感じた。もし今回訪問した場所をただの観光として訪れていたなら、単に「タイの建築物きれいだったな〜」とか、「チェンライの山間部ではお茶が栽培されているんだ〜」といったような感想しか残らなかったかもしれない。けれど今回のプログラムではチェンライの歴史を学び、タイの学生と一緒にフィールドワークをし、それだけにはとどまらず、訪れた場所で聞いたこと知ったこと、現地での生活を通して SDGs との関連を考え、たくさんの人々と意見交換をした。そしてそのことによって一部ではあるけれど、チェンライの現状やタイで行われている取り組みについて知り、いいなと思ったりした一方で、将来のことまで考慮すると本当に良いと言っているのかと疑問を感じたりもした。しかし、これはタイにいたから感じるのではなく、日本で生活していても、「なんで?」とか「〇〇ってどういうことなんだろう?」と少しでも考えだしたら感じるのだと思う。だからこそ、きりが無いと言ってしまえばそれまでではあるけれど、様々なことについて興味を持ったり、そこからもっと詳しく知ろうとしたりして広い知識をつけていけるような人になりたいと思う。

(2) プログラム内容についての全体的な感想

講義室での講義に関しては、現地のタイの学生とディスカッションをしたり、授業中に先生との意見交換等をしたりする時間が設けられていたところが私自身は、よかったと感じた。日本の授業ではあまり積極的に発言することはなく、むしろ「質問や意見がある人はどうぞ」といわれてもなかなか声を出せない。その点タイでの授業では、無理に発言することを強制されるのではなく、生徒間や先生と生徒での意見交換を通して考えを深めたり、ひとりでは気づけなかったことを考えるきっかけができたように感じた。また講義でタイやチェンライの歴史について学んだあとに実際にフィールドワークとして習った現地を訪問できたことも、より理解を深めたり、興味を持ったりすることにつながったと考える。さらに観光・フィールドワークの際に日本の生徒とタイの学生が均等に混ぜられたグループで行動することができ、そのグループが固定ではなく毎日変更されていたことによって、たくさんの人々と話をする機会ができたことがとてもよかった。プログラムに参加する前は、「なんか日程キツキツで大変そうだし、できればもっと自由時間ほしいな」と感じたけれど、プログラムを終了した今振り返ると、とても充実していて限られた留学期間を有意義に過ごすことができたと思う。

(3) 今後 START プログラムに参加する後輩へのアドバイス

START プログラムの全日程を終えて、私自身が「もう少しああしておけばよかった」と思うことは渡航前と留学期間中のことに関してそれぞれ 1 つずつある。渡航前に関しては、興味関心の面から少し難しいことかもしれないけれど、「もっとタイの文化を知ったり、簡単な言葉を覚えたりしておればよかった」ということ。文化については歴史や生活にとどまらず、留学先で人気があるポップカルチャーを本当にほんの少しでも事前に知っていたら、現地の人ともっと会話を弾ませることができたかもしれないと感じる。そして言葉については、留学先の人々が「ありがとう」とか、「かわいい」とか、「おはよう、おやすみ」といったような何かしらの日本語を言ってくれた時に私自身うれしく感じたからこそ、それを現地の言葉で返すことができたならよかったと思う。

そして、留学中の事については「現地の人ともっといっぱい話せたら良かった」ということ。やっぱり初めは緊張や、つたない英語で伝わるのかという心配からあまり積極的に話しかけることができなかった。けれど文法が間違っている、会話の途中で分からない単語が出てきても、私自身が何かを伝えようとしたら、現地の子たちは理解しようとしてくれた。けれどただ話を聞くだけではなくて何かを伝えようともしてくれた。だからこそ、変に緊張することなくもっと最初から話すことができたなら良かったと感じた。

私自身、プログラムのことを振り返ってみたら負の感情よりも圧倒的に行ってよかったと思うことの方が多い。短期ではあっても留学するとなったら多少の不安はあると思う。けれどそこまで心配しすぎることもなくある程度の目標や目的をもったうえで気楽に参加できるのがこの START の良い点だと感じる。

2022 年度前期 START プログラム 事後レポート

所属学部・学科・学年	工学部第四類 建築プログラム 第二学年
------------	---------------------

(1) START プログラムに参加して何を学んだか、この経験を今後どのように活かしていきたいか
<p>このプログラムを通じて一番に学んだことは、寛容であることの大切さだ。これは現地の学生と交流をしていく中で気づいたことである。何気ない質問に対して一つ一つ親切に丁寧に回答してくれたり、後から思い返すと失礼だったかもしれないと感じるような言動を受け入れてくれたり、タイの文化を教えてくれるだけでなく日本の文化を知ろうとしてくれたりといった、彼らの大らかな一面に感動させられてばかりだった。そうした彼らの姿勢があったからこそ、私達は慣れない土地でも気兼ねなく異文化交流・協働に取り組むことができたように思う。自分と違う何かに対する寛容さは、対人関係を築く上である程度は欠かせない当たり前のものであろう。国籍が異なる人とのコミュニケーションの場だけに限らず、同じ日本人同士でのコミュニケーションにおいても、生まれや育ち、学んでいる学問分野が違えば価値観の違いを感じることは多々ある。そうした場面においても、違いを偏見のない目で受け入れ、互いを尊重しあったコミュニケーションを確立していくことが必要だと思う。今回出会った学生さんたちから学んだ寛容さを忘れることなく、他人に対して寛容な心をもって接することができるようにしていきたい。</p>
(2) プログラム内容についての全体的な感想
<p>体調不良により最後の現地の学生とのプレゼンテーションをする活動に参加できなかったのがとても心残りだが、どの活動にも楽しみながら参加することができたので良かったと思う。個人的には、現地の学生と過ごした時間がとても印象的だった。自分の英語は果たして通じるのかという不安から始まったプログラムだったため、最終日に現地の学生と別れを惜しむほどの関係を築くことができたのは意外で、それが何よりも嬉しかった。今回の交流を通して、英語は単なるツールであるということを痛感した。育った国も文化背景も違っていても、英語というコミュニケーションのツールのおかげでお互いの考えや感情を共有できる喜びを味わうことができたように思う。また、教室の中でただ教授の話聞くだけの受動的な学びだけでなく、自分たちが意見を積極的に述べて考える能動的な学びを得ることのできる講義は、とても実になった。現地の学生さんから博物館の資料や寺について説明を聞くことができたのも、自分から知りたい・聞きたいという気持ちをもって話に耳を傾けるきっかけになったので良かったと思う。</p>

(3) 今後 START プログラムに参加する後輩へのアドバイス

健康管理に気を付けて、というのが私から伝えることのできる一番のアドバイス。私は細菌によりおなかを壊してしまったために二日間入院し、プログラムに参加できないという悔しさと多方面に迷惑・心配をおかけする申し訳なさを経験することになってしまった。タイで過ごした数日はとても楽しく、自分では全く疲れているなど感じていなかったが、後から考えてみれば確かに疲労はたまっていて、それは細菌に感染する一因になったのだらうと思う。体調がすぐれないと感じたときにはすぐに周りの人に相談すること、夜は疲労を取るためにしっかり睡眠をとることを心掛けてほしい。

あとはやはり、英語について。私は受験英語しか学んだことがなかったため、実際に海外に行って初めて、日常で使える英語を全然知らなかったことを痛感させられた。伝えたいけど伝えられない悔しさを少しでも減らすためにどんな英語を知っておくと便利か、それを学ぶためにはどうすればいいのか、自分で考えてみる必要があると感じた。